

任期中に発災した 3・11 東日本大震災



技術士包装物流会
相談役・理事 西 襄二

多くの先人及び現役会員技術士の真摯な活動の積み重ねにより、当会が発足 50 周年の節目を迎えたことは誠に喜ばしいことです。この後も相互に研鑽を継続し、一層社会に貢献できる組織として発展することを切に願うものです。

さて、小職が前任会長の白川宏氏の推薦をうけ、会員の承認を頂いて会長に就任したのは 2006（平成 18 年）のことでした。白川氏は、長く包装分野を背景とする会員から会長が選出されてきた歴史に一石を投じ、物流分野を背景とする会員からも会長職に登用すべきとのお考えを表明され、この時より、包装と物流の夫々の専門分野に活動の背景を有する会員が交互に当会の代表を務める慣わしが始まったと記憶しています。

包装と物流は工業包装の部分で接点を有し、大きく括ればロジスティクスの範疇にどちらも含まれるとは言え、掘り下げてゆけばかなり趣を異にする分野であることはご高承の通りです。そして、包装も物流も社会の動きに大きく影響を受けて折々の活動の力点が変化するものでもあります。2008 年 9 月 15 日に発生した所謂リーマンショックでは、世界的な金融危機を誘発して景気の落ち込みとそれから相当期間続く経済の低迷により物流量が大幅に落ち込み、物流業界に大きな影響をもたらしました。しかし、物流の効率化への動きへとつながる建設的な取り組みも改めて芽生えたといえます。包装についても様々な変革のきっかけになったということが言えましょう。

重任3期目の2011年3月11日午後2時46分に発生し「3・11東日本大震災」と記録されることになった大地震は、その地震と誘発された巨大津波による被害の規模において歴史に記録される悲惨な災害となりました。また、東京電力福島第一原子力発電所の原子炉破壊に至った事故の深刻さは、建設当時の判断の甘さを含む人災の側面も否定出来ず、現在も大きな社会問題であることに心が痛むとともに、技術者としての役割の重要性を再認識させられます。

この発災後間もない5月に、我々が遭遇し観察した様々な事象についてロジスティクスを専門とする技術士集団として検証を行い、とりわけ災害救援物資の物流上の問題を掘り下げ、今後の対応にシステムの改善が必要であるとの認識に立ってプロジェクトチーム（以下、PT）の発足を会員に呼び掛けました。これに呼応して10名〔石野智子、岡田明、黒瀬直孝、齋藤正宏、高桑宗右衛門、高垣俊壽、坂直登、福喜多俊夫、前田一也、西襄二(敬称略・五十音順)〕の参加申し出を受けて活動を開始しました。

その年の12月に暫定報告を取り纏め、翌年に全八項目に整理した提言書を作成して当会HPに掲載する一方、関係各方面にも働きかけを行い、TOKYO PACK 2012展では第一回の出展も行いました。

その後、提言内容は各方面の専門機関の施策としても多くの改善が現実にもみられたこともあり、私達のPT活動は「発災後2週間の緊急救援物資のロジスティクス」に絞り込んで再出発することとし、メンバーの意向を汲んで第二次PTとして5名〔奥田栄司、坂巻千尋、齋藤正宏、坂直登、西襄二(敬称略・五十音順)〕の編成で取り組みを継続中です（2016年11月30日現在）。

この間、緊急救援物資を本当に必要とする被災者に迅速に届ける為には、一次集積所の設置・運営に始まり、救援物資の分類と識別法に一段の工夫が必要であるとの結論を得て、対象品目を七種類に大分類し、夫々の梱包外装に内容に相応しい分別色彩を割り当てて遠目にも識別し易くする手法を着想したのです。そして、色彩研究の専門機関である（一般財団法人）日本色彩研究所、及び日本大学理工学部 堀江研究室の協力を得て大分類品目に内容の連想し易さも考慮した特定の色彩とピクトグラム（案）を割り当て、二回目の出展を行ったTOKYO PACK 2014展の会場を訪れた来場者と、別の場所での一般大衆に対するアンケート調査を経て提案色を詰めてゆきました。

一方で、実際の災害発生時のオペレーションを司る地方自治体（神奈川県、東京都等）の防災担当部署、これらを統括する国の機関（内閣府防災担当部門、国交通省物流担当部門等）への提案活動を重ねました。こうした活動がどこまで影響を与えたかは分かりませんが、2015年度の終りに国土交通省の物流担当

部署から「日本の先進的物流システムの海外展開を推進する」方針が発表されるという新たな動きが出てきました。

私達が「大災害に対応するロジスティクス研究会」の活動を通じて提案している「色彩分別法システム」を本当の意味で普及させるには、システムとして標準化し規格化することが必要との認識に至っております。災害大国の日本に生まれ、活動を継続している当会「技術士包装物流会」の会員として世界標準規格とすることを視野に、現在、この作業に取り組み邁進中であります。

上記の「ロジスティクスの仕組みを切り口として規格化する」作業は前例が無いので作業は容易ではありませんが、当会所属技術士会員が将来に亘りコンサルの一形態として手掛け得るビジネスモデルの一つではないか、と考えています。そうした観点からも是非共実現させたい課題であります。

会員はもとより関係友好団体の皆様におかれましても、引き続きのご理解とご支援、そしてご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。